

人が本をえらぶのではなく、本が人をえらぶのではないかと思つ時がある。私を魅きつけた教母の本についての一文——私にとっては、神話と云へ思える本の数々。以下はコメント。

◎飢餓の神話——小林信彦「冬の神話」(角川文庫)

のびぎならない飢餓を経験したことなど、ない。なるほど学生時代、腹をすかせてはいたが、それは、食うことより先にすることがあるという気おいがあつたからである。食ふよと思へば、食べるものはあつたのだ。あまり長く食べないでいたあけく、病氣になつてしまつたが、飢餓の時節に食わないで病氣になるのは、喜劇である。

飢餓の時代があつたのだ。「冬の神話」は、昭和十九年夏、戦火をさけるべく、集田疎開した子供たちの生活を、作者の体験をふまえて描いた小説である。追いつめられた子供たちの精神の軌跡。この世の地獄をみた、と小林信彦は、書いている。

戦争は、いかなる戦争でも、必ず人間を追いつめるものである。——これは、「きけりだつみの声——日本戦没学生の手記」の序文として書かれた渡辺一夫の「感想」の一節である。この序文は美しい。渡辺一夫は、狂気と正気の交錯したフランス・ルネッサンスの研究者である。また、フランソワ・ラブレールの「カールガニエフとパンタグリユエル物語」(岩波文庫)の訳者・研究者である。今年、故人となった。渡辺一夫が記して「感想」に記したジャン・タルトゥーの詩の一節を次に引く。

死んだ人びとは、還つてこない以上、

生き残つた人びとは、何が判ればいい？

小林信彦の小説には、ヘオヨヨ大統領シリースマン(角川文庫ほか)

がある。中原昌彦名義の又篇の小説「虚栄の市」「汚れた土地」ゆがびかれすくは、共に絶版のままである。英文学者サカレに「虚栄の市」という長篇小説がある。小林信彦は、空論にサカレを選んでいる。絶版のままのふたつの小説も、青年の屈折した精神を抑制のきいた文章で描破している佳作である。

◎再生の神話——岡田節人「細胞の社会」(講談社ブルーバックス)

ヒトも、もともとはたった一個の細胞だったのだ。それは受精卵というものである。一個の受精卵が、卵割・細胞分裂をくり返し、発生をつづける。細胞分裂でできた娘細胞は、母細胞と本質的に同じものである。ところが、細胞は、しだいに、その性格を異にしていく。ある細胞は筋肉になり、ある細胞は骨になる。脳ができ、眼ができる。つまり、細胞は分化したのだ。もう、あともうはできない。生まれなおすことは、できないのである。

ほんとうに、できないのだろうか？

このおそろしい疑問が、細胞分化の研究を支えている。

植物では、成長しきつたニンジン、一個の細胞を、実験室の器内で培養して、ちやんとしたニンジンを作ることができた。生まれなおしたのである。

動物では、カエルの一種(アフリカツメガエル)で成功しただけ。しかも、卵の細胞質のたすけをかりて、である。

だからといって、あなどってはならない。人間でも同じことができ

るという可能性を示しているのである。たとえば、私の白血球なり他の細胞なりをもかく一個培養すると、生物学的にまったく同じ「私」ができてくるというリクツツである。百個培養すると、百人の「私」ができる。百人の「私」のうち、どれが本当の私だろうか？

現在のところ、人間では、理論的には可能でも、現実的には不可能である。

このこと下願まけの生物学について書いているのが、「細胞の社会」である。読みやすく、志も高い。岡田節人は、「サイエンス」57年12月号、「サイエンス・フィック・アメリカン」日本語版に、「江口吾郎との論文「細胞分化の転換は可能か」を寄せている。

◎産児の神話 —— ジェイン・オースティン「自負と偏見」

(新潮文庫之冊、中野好夫訳)

北大附属病院に入院していた。病室の窓からみると、外はまぶししかった。夏だった。

毎日、同じような日がつづくと感じることがある。変化がない。単純だ。そして、精神的に疲れる。

けれども、よく考えてみると、昨日と今日は決して同じではない。今日と明日もちがうだろう。なにかが変化している。いろんな新しい経験をしているにちがいない。ただ、それを打ち捨ててしまっ、ふりかえろうとしない。道にころがっている石くれも、生きているのではないかと思ってみると、眼がひらかれるような気持ちになる。

毎日、いろんな物を見ている。いろんな人を見ている。みたくなん

かないのに、みせられていて、と思う時には、苦痛だ。けれども、みんな何かを語っているのだ、その声を聞こう、そのすがたをみよう、と一歩、積極的にふみ出すことによって、世界はいくぶん新しくなる。甚井由実の詩の一節。

やさしさに包まれたなら きっと

眼にうつる すべまのことは メッセージ

入院している時に、病院のベッドで、「自負と偏見」を読んだ。すると、現実の世界が、きわめて透明なものに思えてくるのだった。飾りたてていたものが、しだいに消えていって、あとには、人間の生だけが残る。人から誤解されたり、人を誤解したり、理解されたり理解したりする生活・人生に、いとしさを感ずる。

「自負と偏見」の原型と思われる「初印象 First Impressions」を書いた時、ジェイン・オースティンは、二十一、二歳であった。種々の条件により、「自負と偏見」となって出版されたのは、それから十六年後だが、二十一、二歳の多感な分別あるオースティンの観察の鋭さや豊かな知性が、文章に脈打っている。私は、二十二歳の夏に読んだわけだ。十八世紀の英国の片田舎の女性が、同年令のころに、これだけ鋭い観察力を持っていたことに、すっかりおどろいてしまった。

夏目漱石が「オースティンは写実の天才なり」と激賞した。原題は *Pride and Prejudice* で、「高慢と偏見」と訳されることも多い。中野好夫の訳が、読みやすい。サマーセット・モームが選んだ「世界の十大小説」(山石波新書、8冊)のひとつ。

④侵襲の神話——石牟礼道子「苦海浄土」——わが水俣病への講談社文庫)

豊かな海の幸にめぐまれた不知火漁を、チソソ水俣工場の排出する有機水銀が次第に侵襲していた。それとは気づかれぬうちに、海の魚は水銀で汚染された。

まず、猫がおりだした。そして、死んだ。猫が滅びれば人も滅ぶ。人も侵襲されていた。水銀は、中枢神経を侵す。手足はマヒし、目や耳は不自由になる。知能障害を伴い、ついに死にさえ到る。

故郷が侵襲された。水俣は、石牟礼道子の故郷である。「苦海浄土」は、現代の、語部石牟礼道子の記した人間の記録である。

繋糸がぬ沖の拾小舟
（しほしほくが、はてすておぶね）
生死の苦海（果もなし）

石牟礼道子は、死者の声を聞くとうとする。「死者と話さうとする」。

「いかなる死といえども、ものいゆぬ死者、あるいはその死体はずでに没個性的な資料である、とわたくしは想おうとしていた。死の瞬間から死者はオプツェに、自然に、土にかえるために、急速な営みをはじめているはずであった。病理学的解剖はさらに死者にとって、その死が意行的に行なうひとときや苛烈な解体である。その解体に立ち合うことは私にとって水俣病の死者たちとの対話を試みるための儀式であり、死者たちの通路に一步たちいることにはかならないのである。」

水俣病患者の病理学的解剖にたちあつた石牟礼道子の、次のような文章を読むと、死者もまた哭くのではないだろうか、と思える。

「ゴムの手袋をしたひとりの先生が、片掌に彼岸の心臓を抱え、

スを入れるところだった。私は一部始終をじっとみていた。彼女の心臓はその心室を切りひらかれたとき、つましく最後の吐血をどけ、私にどつと、なにかなつかしい悲傷のおもいがつきあけてきた。死とはなんと、かつて生きていた彼女の全生活の量に對してつましい営みであることが。」

大宅壮一ノフィクション賞第一回受賞作として、雑誌「文藝春秋」に、「ゆきなきき書」など一部が転載された。それを読んで、おどろいた。迫力。生命力。

石牟礼道子は受賞を辞退した。個人として名譽を受けるべきものではない、というのが、辞退の理由だったと思う。

第二部は「天の魚」と題され、筑摩書房から刊行されている。

⑤魂の神話——カート・ヴォネガット・ジュニア「コタイタンの妖女」(早川書房ポケットSF、浅倉久志訳)

ポケットをひっぱり出して裏返すように、ヴォネガットは、魂をひっぱり出して裏返す。魂のなかには、ずいぶんいろんなものが入っている。一見、荒唐無稽に物語は展開する。しかし、実は意識の物語である。SFとは、この場合、サイエンス・フィクションの略語ではなく、スペキュレイティブ・ファンタジー Speculative Fantasy の略語と考えるのがよいのだ。

「自衛と捕虜」の章では、ものが新しくみえてくる時の驚異きについて書いたが、結局、その時には、自分自身を発見しているのである。多くのものを発見すればするほど、自分自身が豊かになっていく。

自分以外のものに、自分を見出し、自分の中に、自分以外のものを見出す。視野を狭く限ってしまうことはない。「青春とは歩く道の広さである」と、北山修は書いた。「戦争を知らない子供たち」(角川文庫)。六十歳の青年も、ありうる。

ただ、同時に次のことも記憶しておきたい。

「エドワール・エリヨの、有名な教養の定義を思い出すがいい。

『教養とは、人間が、すべてを忘れ去った時に、そこに残されるものである』

身に着けるものは、教養ではなくて、虚栄だ。」(なだいなだ『片目の哲学』(角川文庫))

「タイトンの妖女」のタイトルとは、土星を手ゆる月のひとつであるが、特にそれが舞臺というわけではない。マラカイ・コンスタントは、地球から火星へ、火星から水星へ、そしてまた地球へ戻り、最後にタイトルへ着く。彼は、選ばれた放浪者に見える。だが、実は……

「タイトンの妖女」は、ヴォネガットの長篇第2作め。処女長篇は「プレイヤー・ビヤン」(早川SF文庫、浅倉久志訳)。3作めは「猫のゆりかご」(Cats Cradle) (おやこりゃとこいう意味である) (この本には、まず、この本にないことは、事実であ

る。『Nothing in this book is true.』。原稿が投下されたその日その時、原爆を發明した科学者が何をしてたかを調べることから始まって、ついには、その科学者が「さまざまに」發明したアイヌ・ナインという物質により、世界が凍結してしまうおぼなし。第1章の冒頭は「Call me Jonah. (私をヨナと呼んでらおう)』

この「Call me Jonah」という書き出しは、ハーマン・メルヴィルの傑作「白鯨」の書き出しと同じである。また、ヨナは、聖書に登場する鯨にのまれる鯨鯨をする男で、「白鯨」中でも、ふれられている。

「猫のゆりかご」は早川書房刊。ただ、品切かもしれない。

つづいて、「母なる夜」(白水社、池澤夏樹訳)、「屠殺場5号」(早川書房、伊藤典夫訳)。「屠殺場5号」の一節。

「第二次大戦ののち、わたしはしばしばシカゴ大学に通った。人類学科の学生であった。わたしはそこで、人間各人のあいだにはいかなる差異も存在しないということと教えられた。いまでも大学では同じことを教えているかもしれない。

もつひとつ人類学科で学んだのは、この世に、奇矯とか、性悪とか、低劣といわれる人間はひとりもないということである。わたしの父が七くなるすこし前、わたしにこういった。『おまえは小説の中で一度も悪人を書いたことがなかったな』

それも戦後、大学で教わったことのひとつだ、とわたしは答えた。『ヴォネガットのある小説の登場人物は、別の小説の登場人物になることがある。彼の戯曲「ティミッドとティンブクツのあいだ」は、「タイトンの妖女」の音題のひとつであり、「お誕生日おめでとう、ウォンダ・ジューン」のウォンダ(ワンドン)は「タイトンの妖女」に一度登場する。トラルファミアドール星人、オヘア、ローズウォーターなどなど、個々の作品を無視して、あちらこちらと顔を出す。面白い。「ローズウォーターさん、あなたに神の祝福を」と、「チャンピオン家の朝食」は、邦訳が出ていない。残念。

④行動の神話——梅棹忠夫「知的生産の技術」(岩波新書)

「タイタンの女王」の章で、ヴオネガットが人類学を学んだことを知った。さて、梅棹忠夫は人類学者である。人類学者は、まじまじに土地へ出かけて、その人たちと交流し、生活し、その「くらしぶり」を研究する。ヒトとは、いったい何なのか。

高校の現代国語の教科書に、梅棹忠夫「モゴール族探検記」(岩波新書)の一部が載っていた。異郷へのあこがれと、文章の歯切れよさに感心して、その全部を読んだ私は、たちまち机上の探検家となったのである。ヘンリーの中央アジア探検や、南極探検の悲劇の雄・スコット、ハイエルダールのコン・ティキ号漂流記など、冒険や探検の記録に魅かれた。やることは、たくさんあるんだ。

梅棹忠夫は、視野の広い人である。試みに「文明の生態史観」(中公文庫)を手にとってみるがいい。人類の歴史と、生態学の大胆な結びつきが、そこにはある。その視野の広さをまえてるのが、多くの情報を整理する技術と、整理された情報である。「知的生産の技術」は、よりよく考えるにはどうすればよいかというこのコツを教えてくれる。ノート、カード、手紙、原稿などなど。書名をみると、「勉強のしかた」といった感じの本らしく思われるが、実際は、もつと幅が広い。この本が出版された時、私は高校3年だった。だが、中学生の時に読んでいればなあ、と思ったものである。

梅棹忠夫の著作は多い。いろんな分野に関係しているが、その基本的姿勢は「行動のための読書」というところにあるようだ。ただ、偶然と本を読むのではない。これこれのことをするために、この本を読む

む必要がある。そんな風にして、えた知識を使っていく。行動に役立てていく。考えを発展させていく。

梅棹忠夫の長男、梅棹エリオもまた、したたかな行動する人間である。日本で初の熱気球飛行までの記録「熱気球イカロス号」(中公文庫)には、みずみずしい感情がある。

求めよ。さらは与えられん。

⑤秘密の神話——佐藤さとる「だれも知らない小さな国」(講談社文庫)

これは児童文学に入るものである。佐藤さとるの「コロボックル物語」の第一作。以後、「コロボックル物語」は「豆つぶほどの小さな大」「星からおちた小さな人」「ふしぎな目をした男の子」と続いている。第三作まで、講談社文庫に入った。

コロボックルとは何か。それは、アイヌ語で、ふきの葉の下の人という意味である。小さな小さな人である。その小さな人たちの作る国が、だれも知らない小さな国である。ある日、「ぼく」が、この小さな人を発見する。そして……

「ぼく」は、小さな人たちから、「セイタカさん」というアダ名をもらう。そして……

多言は、必要ないだろう。佐藤さとるの「はじめに」という文章だけ紹介しておこう。

「世界は、たくさんのお国々にわかれていきます。

大きな国もあります。なかには、モナコ公国やバチカン市国の

ように、まめつぎのような小さな国も、いくつもあります。

このうち、そういう小さな国をくぐらべても、まだまだけたはずれに、小さな国があります。それも、遠くではありません。悪いところか、日本のすぐそばにあるのです。——と、こんなことをいって、世の人は、きつと、びっくりすることでしょう。もしかしたら、わらいだす人もあるかもしれません。

でも、わらうまえに、この小さな国の物語を読んでみてください。たれもが、心の中に、「小さな国」を持つている。

◎動物記——コンラート・ローレンツ「ソロモン」の指環——動物行動学入門（早川書房）

有名な動物記がある。けれども、そこに描かれた動物たちには、どうも、著者の感情が色よく投影されすぎていて、人間的すぎるころが多い。新しい動物記は、ローレンツの「ソロモン」の指環のように、または、伊藤嘉昭編「アメリカシロヒトリ」（中公新書）、正木進三「昆虫の生活史と進化」（中公新書）のように、書かれるべきだろう。今面錦司が監修した「日本動物記」（4巻、思索社）のようでもよい（この中から、伊谷純一郎「高崎山のサル」は、講談社文庫に入った）。また、坂上昭「コミツバチのたどったみち」「私のブラジルとそのハチたち」（思索社、残念だが高価）のようでも、伊藤嘉昭・桐谷圭治「動物の数は何で決まるか」（NHKブックス）、内田俊郎「動物の人口論」（NHKブックス）のようでもよい。

動物に人間的感情を押しつける前に、動物的感情のありかたを知ら

なければならぬ。コンロモンの指環」をベストとして、ローレンツの「人、イヌに会う」（至誠堂、これはイヌとネコについての本）、「攻撃性」（ヌエ、みすず書房）は、その達成である。

十八才の夏、最近はおんまりモノに感動しなくなったなあ、といわばシラけていた私は、図書館でふと手にとったポロポロの「ソロモン」の指環」を読んで、打ちのめされたような気がしたのだ。た。「感動しなくなった」などというのは、自分が、おじって来たからだ。世の中を甘くみすぎている。たかをくくっていた。

まだまだ、いろいろなことがあるのだ。思っていたより、世の中はずっと広いのだ。人間の社会も広いが、動物の社会は、もっと広いのだ。

日本のローレンツにたとえられそうなのは、畑正憲である。アタタはムツゴロウ。彼の本は多く、文庫化されているもの（文春文庫・中公文庫・角川文庫）も多い。「われら動物みな兄弟」（角川文庫）が私は好きである。

「ソロモン」の指環」も、われら動物みな兄弟という感のする本である。本のみよって、生物を真に理解することはできないだろうが、本によつてしか理解できないことも、あるものである。

◎蛇足であろうが、店頭にはない本は、書店で注文すれば取りよせてもらうことができる。その際、出版社名と著者が必要である。著者名は分らなくてもよい。分るにこしたことはないが。